
adagio

神崎みこ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

adagio

【Nコード】

N8163X

【作者名】

神崎みこ

【あらすじ】

人と上手く接することのできない秋音は、同じくあまり人に興味のない教師古瀬と出会う。偶然が重なり、僅かな引力でお互いに興味を持ち始める二人。置かれた環境から戸惑いを覚えながらも二人の距離は人知れずゆっくりと、ゆっくりと近づいていく。

女子高生と教師のスローテンポな恋愛（未満）もの。全12話予定。

四月・はじめて

春は少しだけ苦手だ。

人とのやりとりが得意じゃないわたしにとって、クラス替えも、環境の変化も、それらを含む全てに対してハードルが高い。正直、逃げてしまえば楽なのにな、と思わないこともない。

だけど、そんなことは口にも出さず、わたしはいつものようにへらりと笑って、友達とおしゃべりをする。

少し甲高い声がわたしの周りを飛びかい、新しい担任の登場によりそれは中断された。

ほっとして、わたしは決められた席に座りなおす。

基本的には代わり映えない生活。退屈で、だけど時間は確実に過ぎてくれることを知っている。好きなことも嫌なことも、何度も息をして眠ってしまえば過去のことになるから。

担任は普通の中年のおじさんで、あからさまにがっかりした雰囲気。が女の子たちから漏れていることを気にもしていない。簡単に説明をして、わたしたちはまた新学期第一日という少し特殊な日から日常へとスライドしていく。

二年生というゆるやかな空気の中、授業が終わった後はぼんやりと図書館で過ごす。それは一年生の頃からのことで、最初は妙に見られていたわたしの行動も、そのうちそういうものだと思われ認識されていた。

バイト以外はここで過ごすわたしは、いつも座る席に腰掛け、ゆっくりと厚い表紙をなでる。

古ぼけてやや痛んだその本は、有名なファンタジーのひとつであり、正直わたしには少し難しかった。

でも、その世界観が好きで、わたしは何度でもそれを手に取った。背表紙を開き、ページをめくる。

周囲の音が徐々に小さくなっていき、わたしは本の中へと没頭して

いく。

どれぐらい時間がたったかわからなくなったところ、カタンという小さな音でわたしは本の世界から引き離された。おそらく集中力が弱くなってきたのだらう。目をこすり、軽く肩を回して丁寧に本を閉じる。

「ごめん」

聞き覚えのない声がありきて、わたしはそちらへと視線を向ける。身に覚えのない謝罪を受け、わたしはその人物をきつと思つた以上に不審な目で見ていたのだらう。すっかり恐縮しきつた人物がこちらをまつすぐに見つめていた。

「音、たてちゃつて」

男の人は、事態を把握していないわたしを尻目に、淡々と説明を続ける。

おそらく、わたしが集中を切れさせるきっかけをつくつたであろうあの物音を立てた人だろうと、ようやく検討をつけた。ゆるゆると頭を左右に振つて、気にしていないと態度で示す。外はいつのまにか暗くなつており、あわてて時計を見ればここの閉館時間が迫っている。

いくらここにいたいと願つたとしても、所詮高校の施設を二十四時間開放してくれるわけではない。

のろのろと立ち上がり、今まで読んでいた本を手取る。

「もう帰らないといけないですから」

ぎこちなく笑う。

「珍しいね」

それは、わたしがここにいることだろうか。それともここに高校生がいることだろうかと考え、おそらくわたしのことを知らないこの人は、後者を知りたいのだろうと推し量る。

「結構いますよ、常連さん。今日はたまたまわたし一人ですけど」

こんな辛気臭いところに、とクラスメートは言うけれど、意外とここには人がいる。そのほとんどが固定されたメンバーだから、数少ない変わり者の巣窟ともいえるのかもしれないけれど。

何かの資料なのか幾冊もの本を机の上に置き、さらには数冊の本を右手に持った人は、困ったような笑顔を作る。

話しかけたまではないが、それ以上の会話を続けられないのだろう。先生にしては珍しいタイプだと観察をする。

記憶の奥底からひっぱりだし、この人が同じ学年のどこかのクラスの副担任だということを思い出す。

若ければ格好よくても悪くても人気のある商売において、この人の周囲は比較的静かだったこともついでに。たぶん、それはこの人の持った雰囲気のせいなのだろう。

熱血でもなく、だからといって冷め切ってもいない彼はいたって普通の人間だ。だけどその授業があまりにも単調で、ただこなせばいいだろう、という彼の態度に人気が集まりにくいのだと誰かが言っていた。

彼は教師という職業があまり好きではないのかもしれない。

「手伝いましょうか？」

確実に両手に余るその本たちに手を伸ばしたら、彼の左手に少しだけ触れた。

その瞬間、彼はものすごい勢いで手を引き、そして困ったように笑った。

その笑顔は仮面のように、そして確実にわたしを拒絶していた。

「先生さようなら」

わたしはおもしろいものをみたような気分で彼に挨拶をし、そして図書館をあとにした。

人間嫌いの教師。

その矛盾した言葉に、彼に少しだけ興味を覚えた。

古瀬学という名前だと、あの先生のことがあったころには、時間は随分とたってしまっていた。

積極的に探しだすつもりも、知るつもりもない。

だけど、耳に入った名前は、わたしの記憶にしっかりと残ってしまった。

人の名前など覚えることが苦手だというのに、よくわからなくていつのまにかへらりと笑っていた。

「気持ち悪いなあ」

「ごめん、ちょっと」

それ以上は聞いてはこない彼は、わたしの額を軽く指先ではじく。

痛みに額を押さえ、涙目で彼を見上げる。

幼馴染で保護者のようでもある高井亮太の家に、わたしはこうして入り浸っている。

彼の父親は、仕事人間であり、あまりこの家にはたどり着けないでいる。

わたしの家は、両親そろってそれぞれの恋人のところにもいるのだろう。

もう顔もおぼろげな彼らを思い出し、乱暴に大根を切る。

「泊まってく？」

「うん」

いつもの会話を交わす。

コンロの上には味噌汁にする予定の出汁が入った鍋と、まだ何も入れられていないフライパンが一つのっている。

これから簡単な料理をして、亮太と一緒に夕食をとる。

わたしにとってはありふれた日常。

けどふいに浮かんできた男の顔に、わたしは戸惑いを覚えた。

五月・手を繋ぐ

学生のころに読んだ本を読み返してみたくて、唐突に図書室というものに行ってみた。

将来のことなど何も考えず、ただなんとなく読まされていた本も、今なら別の感想をもつかもしれない。

そんな自分らしくもない思いつきにとらわれたのは、久しぶりにきたメールに影響されたせいだ。

他愛もない内容のそれに、どれだけ振り回されているのかも知らずに、それでも拒否もできないでいる。

かすかなそれでもつながつていたいのだと、思い知らされる。

こんなに未練がましい自分は、大嫌いだというのに。

少しかび臭い部屋に入る。静寂と懐古、という雰囲気押し寄せ、そんな経験はないのに懐かしさすら覚える

図書係がいるはずの場所には、誰も存在せず、そして図書室には一人の生徒がおとなしく座っていた。

運動部で適当にすごしていた自分は、学生時代にあんな風に熱心に本を読んだ記憶はない。ただ受験のためになる、だとか、忌まわしい読書感想文のための本探しでぶらぶらした程度だ。

覚えていたタイトルの本を、片端から集め机の上に積んでいく。それだけでなにがしかの高揚感が得られ、こういうのも悪くはないという気分になしてくれた。

読みきれはるはずもない本が積まれた机の反対側には、一人の女生徒が座っていた。見覚えのないその子、といっても僕は人の顔をおぼえるのが苦手なだけ、は同じ格好でずっと本を読み続けていた。動いているのはページをめくる手だけ。

文学少女、というベタなイメージからは程遠い彼女に見入ってしまったのか、教師である自分が騒音の元を作ってしまった。

それに気がついたのか、彼女は本から目を離し、ゆっくりとこちらを向いた。

少し茶色がかった瞳がこちらをまっすぐに射抜いたような気がして、わけもなく目を逸らしたくなった。

手伝おうとした彼女が自分の手に触れ、瞬時にして大げさにその手を引き上げた。

彼女は驚くでもなく、悲しむでもなく、ただ淡々とこちらを見据え、そして笑った。手を繋ぐわけでもないのに、いやそれにしたところ
でこんな大げさな反応は成人男性がやっていいものじゃない。

彼女の白い手に、何かを思い出しそうになった。

言い訳するのもおかしくて、何も言えないでいる自分に、彼女はにこやかな顔を向けた。

そしてさようなら、といいながら何事もなかったかのように隣を歩き去っていった彼女の残したかすかな香りに、体のどこかが痛んだ。

授業は、教師という仕事のうちの一つにすぎない。

教えやすく、だとか、興味を持ってもらおう、だとかそういう気持ちを抱いたことはない。

与えられたノルマを、与えられた量だけきちんとこなせばよい。自分自身が学生の頃をみて、必要以上に装飾過剰な授業は好きではなかったと言いつける。

たぶん、きっと、僕はこの仕事を心から好きでいるわけじゃない。

「先生？」

自分の授業がわかりやすいのかわかりにくいのかも、正直よくわからない。嫌われても好かれてもないせいかな、そういう声が自分に届きにくいのだ。

だから、それを言い訳に、自分のスタイルを崩さないでいる。

だけど、そんな僕にも必要以上に懐いてくる人はいて、それは主に年上に憧れる女子であり、そういう人間を僕はうまくあしらえていない。

よくてせいぜい、少し素っ気無くする程度だ。

上目遣いにこちらを見る子どもは、少女というよりもはや女の雰囲気漂わせている。

「ああ、ごめん、どこがわからないの？」

せめて先生らしく、と仮面をかぶって、それなれりの対応をする。職員室には自分以外の職員もいて、みなそれぞれ仕事をしたり、おしゃべりをしたりして過ごしている。放課後の雰囲気はこんなもので、この学校には強烈に学生に好かれていて先生がいるわけじゃない。そこそこ好かれ、そこそこ嫌われ、そして大部分には興味の対象外。たぶんそれが一番問題が起これなくて居心地のいい学校運営だろう。その典型例が自分というだけで。でも、たぶん、本当の意味で、彼らに興味がないのは、僕だけだろう。

ちぐはぐな文字で書かれたノートに目を落とし、丁寧に彼女の質問に答えていく。

やがて満足そうな顔をした彼女は、舌足らずな礼を口にして帰宅していった。

周囲に気がつかれないように息を吐き、教科書をしまう。

「読みました？」

安堵したのもつかの間、声がかかる。

それは同僚からのものではありえなく、まだ幼さが残る少女特有の不安定な声音だった。

声の持ち主を探す。

記憶が、蘇る。

苦いメールの文章とともに。

一月ほど前に借りた本は、結局そのまま読まずに図書室へ返す羽目となった。

もともと読書などする習慣がない自分がどうかしていたとしか思えない。一冊目の序盤あたりで、もはやそれは睡眠薬と同義となっていた。

「ああ、まあ」

曖昧に答え、あの時挨拶を交わした少女をみやる。

彼女は笑顔を称えている。

その笑顔はどこか不自然で、だけどどうしてそう感じるかもわからない。

担任教師に何かを渡したあとなのか、おおよそ職員室に不似合いな中庸な少女は、軽く頭を下げて帰っていった。

再び、あの時と同じ残り香を置いて。

家路につき、無意識にパソコンの電源を立ち上げる。

最近は携帯でやり取りすることもあるものの、どちらかといえば男同士ではパソコンでメールをやり取りすることが多い。そのせいか、どうしてもルーチンワークのようにメールソフトをひらく癖がある。今日も、着信を知らせる音がなり、いくつかのメールを確認する。その中に、あの日の自分を浮つかせた人、からのメールが紛れ込んでいた。

フルネームで登録されたそれも、すでに違う苗字になっている元彼女からのメールだ。

クリックして、中身を読む。

そして、他愛もない内容の中に僕と細くでも繋がっていたい、とい

う意図が見え隠れしていた。

未練がましい気持ちからくる自意識過剰、と思い続けていた自分は、彼女のずるさに気持ちが軽くへこんだ。

だけど、それでも彼女の手をとりたいたいと思ってしまっ自分がいて、やけくそになってメールを消去した。

繋いでいた手を離したのはむこうだ。

二度とつながれることのないそれを。

いつもより気分が上下しない自分がそこにいた。

いつのまにか落ちた眠りの中で、確かに誰かと手を繋いでいた。それが誰かはわからないけれど。

六月・雨の音、二人きり

「ごはん食べてく?」といつてもあまった弁当だけど」

「ああ、見張つてないと秋音は食べないから」

コンビニのバイトをやっているわたしを、たまに亮太は迎えにきてくれる。

親でも兄弟でもない彼が、わたしのことを一番思ってくれている。ただの近所の年の違う知り合いだった彼と、こうして二人で過ごすことがあたりまえになったのは、いつだったか忘れるぐらい前のことだ。

放置されていたわたしと、違う意味で放置されていた彼が行動範囲の狭い子供の頃によく出くわすのはあたりまえだ。人の多いスーパー、コンビニ、公園、そういったところを徘徊していた彼とわたしは、いつの間にか一緒に行動していた。

頭がよく、問題行動を起こさない彼と、頭はよくないけれども内向的なわたしは、対外的には大してトラブルを起こさずに、そして徐々にお互い顔の家で遊ぶことで落ち着いていった。わたしが曲がりなりにもまっすぐに育ったのは、彼の愛情があつてこそだと思っている。

たった数歳しか変わらないのに、父親扱いしたら嫌がるだろうけど。わたしの家には誰もいない。

正式には両親がいるはずだが、わたしが生まれた歳に無理して買つたはずのこの家には彼らは寄り付きもしない。

きつと今頃それぞれの恋人のところにもいるのだろう。

わたしはそれを悲観するほど彼らに対して何かの感情を持ち合わせてはいない。

「泊まってく?」

「もちろん」

どちらの家かの違いはあるけれど、ほとんど一緒にすごすというのに、わたしは確認をしない日はいない。

わたしは、わたしで彼に依存している。

役に立たない両親の代わりに。

そして、彼も彼でわたしに依存している。

いなくなってしまった母親の代わりに。

健康的とはいえない関係は、それでもどうにか均衡状態を保ちながら続いている。

亮太がわたしに恋人でもできればまた違うのだろうけど。

そんなことを考えていたら、また、誰かの顔が浮かんだ。

その記憶をかきけすように、わたしは亮太の腕にしがみついた。

元々バイトがない日は図書室に入り浸っている。

大学生である亮太とは帰宅時間が違う。彼は遊んでいそうな外見とは裏腹に、真面目な大学生活を送っているらしい。

あの家には帰りたくない。

だけど、亮太の家に先上がりこむことはできない。そんなことは気にしない、と言われてはいるけれど、わたしの中のなけなしの線引きのようなものだ。

だからこうやって図書室にいるのだけど、試験勉強をしにくる人間どころか常連組みさえいなかった意味に気がつけばよかったのだ。

大粒の雨が図書室の窓を連打してようやく、わたしは彼らがいない理由に気がついた。

空は真っ黒で、古典的な表現ではあるがバケツをひっくりかえしたような雨が空から降り注いでいる。

持ち合わせの折りたたみ傘で帰宅するのはいささか心もとない。

時計をみれば、閉館時間まであと三十分ほどとなっていた。

その時間で事態が好転するとは思えないけど、とりあえず窓を覗き込むために立っていたわたしは席に座りなおした。

雨音しかない室内は、かえって静けさが目立っていた。わたし以外に人がいないのだからなおさらだ。

形式的な図書係ですらとつくに姿を消している。

頬杖についてぼんやりと空をみる。

もはやどれ程好きな話であろうと本に集中できるような状態ではなくなっている。

「あれ？人いたのか？」

驚きを含んだ声がかかる。

その声に聞き覚えがあつて、ぼんやりとした頭を働かせながら振り返る。

「鈴木・・・・・・・・」

聞き取れないほど小さな声で、その人がわたしの名前を呟いた。知られていることに驚く。

彼は、古瀬先生は生徒のことなど興味がないと思っていた。まして全くかわりのないわたしのことなど。

「古瀬先生は押し付けられたんですか？」

鍵束を手にした姿から想像をする。

歳が若い方に入る彼ならば、ここの責任者である教師から面倒くさい仕事を押し付けられそうだと。

予想通りだったらしく、苦笑して頷く。

「外ひどいぞ？」

「そうですねえ」

「帰れるのか？」

「まあ、なんとか」

短い会話を交わす。

眼鏡の奥には感情のよくわからない瞳が覗いている。

この先生は、いつもそうだ。

「送って行こうか？」

興味がなさそうな顔をした先生に、予想外の提案をされ驚く。

必要以上の接触を自ら図ろうとするタイプには到底見えないのに。

だけど、外の雨の強さをみて、さすがのこの人も知らんふりはできなかったのだろうと思い直す。

「迷惑でなければ」

先生は微かに笑って、こちらを手招きをする。

閉館時間には早いけど、わたしを追い出してここの戸締りを済ませるつもりなのだろう。

大人しくしたが、わたしは彼の隣に並ぶ。

暗い色の長袖のシャツに、思ったより細い手首と神経質そうな指先がみえる。

亮太とは違う。

しっくりと馴染んだ彼の体を思い出し、いつのまにか比較していた。

「いくぞ」

「ありがとうございます」

外の雨音だけに支配された車内は、ほとんど会話を交わさなかった

にも関わらず、とても居心地が良かった。

七月・会いたくて

目の端に入る女は、毒々しいとしか思えない色の唇を上下させ言葉をつないでいく。

その姿を見て、やはりこんなところに来るんじゃないかなかったとため息をつきたい気持ちを押さえる。

せっかくの休みにあてられた友人の披露宴は、楽しい同窓会気分などではなく、ひたすら憂鬱なものだった。

会場の円卓に大人しく座り、与えられた酒をあおる。全てを知る友人の哀れむような視線が鬱陶しい。

「女子高生かあ」

唐突に呟かれたそれは、大学の同期が齎したものだ。

昔からそのあたりにやや趣味が傾いていたことを知っていた他のメンバーは、明らかに呆れた顔をしながら若干強引に話を続けていく。この円卓の場を冷ややかにしていた原因が話し続けるよりもいいのだろう、と判断したのだろう。

話をさえぎられたような格好の彼女は、露骨にキレイに描かれた眉を寄せた。

「で、実際どうよ？もてるっしょ？」

「どうだろう？」

「またまたー、あの年頃って年上に憧れるもんでしょ」

うらやましそうにしている友人には悪いが、やはりそれほどいいものじゃない。

あの年代の子供はとても扱いにくいものだ。自分のような距離感をもってしてもたまにトラブルに出くわすほどなのだから、熱心に関

わりをもっている教師たちならなおのことだろう。

特に恋愛がらみのトラブルなど、巻き込まれることを想像しただけでうんざりする。

そして、やはり職業意識を問われかねないが、そのあたりの問題は見聞きすることが多い。

人と深く関わるのはごめんだ。

ましてそれが己の人生に関わるような面倒くささならばなおさらだ。女子高生を食ってしまう同職の人間は、実際いなくはない。表面化すればそれは純愛として婚姻関係を結ぶか、左遷されるか。身内に甘い体質ゆえに、職を奪われることはないにしても、それなりにペナルティーが科せられるのは仕方がないことだろう。それが、教職というものだと、したり顔で説教されそうではあるけれど。

自分は少女趣味ではない。

あの年代の不安定で、なおかつ自意識過剰な少女たちに食指をそえられることはない。

まして、自分は望んで教職についた人間ではない。

なんとなく流されて、なんとなく単位をとって、なんとなくそうなった。

切望して、それでも叶えられなかった人間たちにとっては、唾棄されるべき理由ではあるうとも、僕は僕で、生きていく術として今の仕事を必要としている。

だから少女たちにかまけている理由はないのだ。

酒のためにいささか回りくどくなつた理由を脳内に繰り出し、またビールを飲み干す。

気の利いた給仕がすかさず空いたグラスに冷えたビールを注ぎ、満足してそれを口に含む。

「恋人はいないの？」

世間からすれば好ましくない話題に盛り上がっていた座卓に、冷や

水をさす質問が投げかけられる。

キレイに塗られた化粧の彼女は、余裕の表情で自分を見下していた。いくら鈍感だとはいえ、振った女の不遜な態度に気がつかない男たちではない。だけど、他人が答えにくい質問をさらりと口にする彼女の前に、周囲は口を出しにくい雰囲気陥っている。

私は私にふさわしい人と結婚がしたいの。

ただそれだけの言葉を残し、去っていった元恋人に、精一杯の笑みを浮かべる。

「よりどりみどりとえばそうなんだけどなあ」

「あ、やっぱり女子高生？」

おどけた答えに、先ほど食いついてきた同期が混ぜ返す。

「肌とかぴちぴちでしょー」

周囲にいる女性に悪気がなく彼は好奇心を満たそうと質問を重ねる。そのたびに、元恋人はきれいに塗られたその化粧がひび割れそうなほどの表情を作り出す。

この程度の戯言で気分を害するのならば、あんなことをしなければいい。

抱いていた未練は吹き飛び、執着していた心がどこかへしぼんでいく。

キレイだと思っていた顔も、仕草も、体系も、何もかもがうそ臭くて、人目で高級品だとわかる衣装すら彼女には不釣り合いに見えてしまった。

やや荒れた席も、新郎新婦の幸せそう笑顔が照らし、そして緊張を孕んだ時間は終了する。

二次会に出席するつもりもない自分は、そうそうに引き出物だけを

手に、帰り支度をする。

いつのまにか距離を縮めてきた彼女に、できるだけ感情の籠らない表情を作る。

「二人で抜け出さない？」

まるで断られることを想定していない口ぶりに、自分は彼女のどこを愛していたのかわからなくなる。

かわいい、とも、愛らしいとも思ってきた彼女の何を自分は理解していたのかと。

「悪いけど、明日も仕事だから」
「でも」

甘えたような仕草で、右腕に隙なく塗られた爪をもつ右手を添える。それをさりげなく振り払う。

「化粧なんざしなくてもかわいいかわいい女子高生が待つてるから」

思ってもいない嫌味を口にして、彼女を牽制する。

あの連中に邪な思いを抱いたことは一度とてない。あくまで自分は職業としての教師であり、彼ら彼女らはただの客でしかありえない。だけど不意に浮かんだ、誰かの笑顔に、自分の中で戸惑いを大きくしていく。

二の句を継がない元彼女を尻目に、自分はようやく歩き出した。

一喜一憂することがなくなるであろう自分を想像して、ようやく気分が晴れた。

「鈴木、化粧してるのか？」

分厚い本を開き読む体制に入ろうとしていた鈴木に、思わず声をかける。

その声は思いのほか大きくて、図書室を根城にしている連中から一斉に視線が向けられる。

ほとんどのそれらは、瞬時にして興味をなくし、自分たちの世界へと帰っていく。

ただ、鈴木に関しては、胡乱げに自分を見上げている。

「まあ、それなりに」

常から落ち着いた声音を、さらにボリュームを下げて返事をよこす。彼女が、声を荒げたところや、歳相応にはしゃいでいるところを見たことがない。もっとも、それほど彼女の事を知っているというわけではないのだけど。

最近の流行なのか、黒々と塗られた睫毛を伏せ、彼女もまた本の世界に集中していく。

随分と大人びた顔を見せる横顔を尻目に、読む予定のない本を借りる手続きをとる。

珍しく仕事をしている図書係とやりとりをする間、不自然にならなように鈴木の様子を探る。

どうして、ただの一生徒のことが気になるのかわからない。

彼女とは、ここで初めて会って、挨拶を交わし、偶然大雨の日に送っていったことがある程度だ。

校内で、積極的に会話を交わす関係性ではない。

それならば、甘ったるい話し方をしてわからないことを聞いてくる他の子の方が、よほど親しいともいえる。

なのに、時折こうやってここの場にきたくなるのはどういいうけな

のか。

手続きが終わり、たった一冊の本を抱え、職場へと戻っていく。
まだ残された仕事の量を思い出し、うんざりする現実へと。
会いたい。

ただそんな言葉が浮かび、それを頭の隅へと追い払いながら。

八月・溶けちゃいそう

暑い中、わたしは自転車を漕いで市立図書館へと急ぐ。

昨夜、亮太の家に泊まったわたしは、彼と一緒に家を出た。

大学生らしくバイトとサークル活動とやらの忙しい彼は、規則正しい夏休みを送っている。

家にいていい、という彼の言葉を聞き流し、それなりに居心地のよい図書館であてもなく本を探す。

少なくとも、エアコンが効いているだけここは過ごしやすい。

ようやく今日読む一冊を決め、取ってあった席に戻る。

夏休みは人が多い。それでも図書館の本を利用しない学習を禁止したせいなのか、宿題をするためにやってきていたような人たちは減った。それでも、そこに適当に資料を机の上に置き、学校で与えられた宿題をこなしている学生もみかける。

それらをかいくぐり、ようやく手に入れた椅子にゆったりとすわり、そして本をめくる。

それだけで現実の世界が遠くなり、わたしは本の中に入っていく。どれほど時間がたったのだろう。

空腹を覚えて顔をあげれば、はずした腕時計は随分と正午から過ぎた時間を指していた。

面倒くささを覚え、再び本に目を落とす。

雑音が消え、体の瑣末な現象も感じなくなっていく。

ようやく本を読み終えたころには、閉館時間間際となっていた。

亮太のバイトもそろそろ終わる頃だ。

固まった体をのろのろと動かし本を元の位置へと戻す。

軽く背伸びをしたあと、立ちくらみでその場にへたりこんだ。

暗転した視界と、血の気が下がっていく感覚。じっとしてそれらが治まるのを待つ。

ゆっくりと回復していく視界にあわせ、立ち上がる。

こちらを振り返るうともしない周囲に沿うように歩き始めた。

「おかえり」

待ち合わせた亮太と一緒に、スーパーに買い物に行って、適当にごはんをつまむ。

今日はわたしの家で、自分の家のようにくつろいだ亮太と一緒に戯れるように過ごす。

この時間は嫌いじゃない。

自分じゃない誰かの存在が、わたしが存在していることを強く感じさせてくれるから。

暗闇の中、混じり合って、やがて眠りに落ちる。

ずっとこうやって過ごしてきた。

ひとりきりだと眠れないわたしに気がついて、救い出してくれた人。

「もう少し太れ」

わたしの体を触るたびに言う言葉をお休みの代わりに、亮太は眠りに落ちた。

どこかにそつと触れながら、わたしも眠る。

多分今日も夢をみない。

誰かが隣にいてくれるから。

学校の開放日に図書室へ行って、どつぷりと本を読んだわたしは、

暑さにへばりそうになりながら帰り道を歩いていた。

高校は比較的近い位置にあって、徒歩で通っている。この日も当然歩きで、暑さに陰りが無い夕暮れを後悔しながら歩く。

アスファルトからは容赦い照り返し、沈みかけだというのに勢いが衰えない太陽の光。

そしてぱったりと止まってしまった風に恨み言を呟く。

ようやく見えてきたコンビニの明りに喜ぶ。

自動ドアをくぐり、強い冷気を浴びる。

さして興味のない雑誌をめくり、ゆつくりとアイスを選ぶ。

今日は亮太がバイトで遅い日だ、だからあてのないわたしはこんなところで時間を潰すしかない。

涼しいところでお茶なのは、わたしの経済状態ではそう頻繁にやれることじゃない。

「鈴木？」

「古瀬先生？」

後ろから声がかかり振り替える。

古瀬先生が不思議な顔をして、こちらを見下ろしていた。

背の高い先生と比較的小さいわたしとは、実のところかなりの身長差がある。出会う場所は図書室で、わたしが座っている状態が多かったから気にしないようにしていたけど、改めて見せ付けられたみたいで、自分の成長のしなさぶりにがっかりする。

「先生アイスおこって」

とりあえず軽い感じで強請ってみたら、先生はあっけなくそれを許可してくれた。

拒否しそうなキャラの先生からそんなことを言われて、驚いたままのわたしを尻目に先生は自分の分も選び出す。

あわてて抹茶のアイスを手で渡す。

会計が済まされたあげく、同じビニル袋に入れられ、なんとなく先生の背中を見ながらあとにくっついていく。

無言でしばらく歩いたのち、もう誰も遊んでいない小さな公園にたどり着いた。

比較的キレイなベンチに座った先生の隣に、大人しくわたしも腰掛けた。

少しだけ間を開けて、それでも今までにない距離に戸惑う。

「溶けるぞ」

「ありがとうございます」

座ったきり口も手も動かさないわたしに、先生は水滴のついたアイスを手渡してくれる。

言われるままに蓋を開け、食べ始める。

ソフトクリームの形をしたアイスを食べた先生は、溶けるまもなく勢いよくそれを食べ進めている。

「家、近いんですか？」

「まあ、わりと」

会話が续かなくて困り果てる。

そもそもわたしも先生も話が上手なわけでも好きなわけでもない。

なんとなく一言二言会話しきものを交わすことはあったけれど、それ以上長文を聞いたこともなければ話した記憶もない。

ちつとも涼しくならない気温に多少いらつきながら、アイスを口に運ぶ。

甘みと冷たさが口の中に広がり、少しだけ気持ちが落ち着く。

「宿題はやったのか？」

全くそんなことに興味がなさそうな先生が、先生らしいことを問う。

「なんとか」

家庭教師のアルバイトをしている亮太にしごかれて、いつのまにか宿題は終わってしまった。それ以上勉強させようとする亮太と、したくないわたしは、そういうところでは対立している。

どうも同じ大学に入れたらしいが、わたしの学力と根性では無理だと、本人が匙を遠くへ放りなげている。

「意外だな」

「言われます」

わたしの外見は、どちらかというと軽そうな外見に入る。

細くて猫毛で茶色がかった髪も、派手な顔のパーツも、少しいじれば大人がイメージする遊んでいる女の子だ。

だからといって中身がそうじゃないことを周囲に知らせながら歩くわけにもいかないし、言ったところで信じてくれるわけじゃない。

しょせん人間なんて見た目でほとんど判断されるのだから。

そんなことを考えてたら、先生の眉間に皺が寄っていた。

先生は、わたしとなけなしの会話をするときによくこの顔をする。

困ったような何かを考えているかのような。

それを知ってみたい、と思って否定する。

わたしは、踏み込んだじゃいけない。

先生のアイスはとづくに終わっていて、カップが所在無く握られて
いる。

どうしてそんなことを言ったのかわからないけど、わたしは思わず口をついた自分の言葉に、わたしが一番びっくりした。

「食べる？」

気安い口調で、あくまで冗談のつもりで、スプーンで一口すくった抹茶アイスを差し出す。

もちろん否定されるだろうと思って。

だけど、先生はなんのためらいもなくそれを口にした。

「趣味まで渋いんだな」

そう言つて先生はアイスを飲み込んでいった。

先生が口をつけたスプーンをしばし見つめる。

大人と子供。

わたしはただの子供。

それだけを心の中で呟きながら、溶けかかったアイスをすくう。

やっぱりそれは甘くて、冷たくて。

自意識過剰な自分を誰かが笑っているようで、黙ったまま最後まで食べ続けた。

ごちそうさまでした、と手を合わせたころには大分時間が過ぎていたようで、先生は笑つてわたしと別れていった。

亮太と会える時間までもう少し。

誰もいない公園で、わたしは途方にくれていた。

九月・夏の幻想

嫌になるほど暑い夏が続いたまま、二学期が始まった。

そろそろ最終進路の提出がなされ、クラス分けが考えられるころだ。最終学年で担任になれるはずもなく、おそらくこのまま副担任のままだろう自分は割とのんきに構えたままだ。

進路を相談にくる生徒も少なく、教科を教わりにくる生徒も少ない。それは自分のとっつきにくくしているスタイルによるものだろうけど、やっぱりそれを変える必要性を感じていない。

膨大な事務仕事を片付け、さっさと仕事場をあとにしてねぐらへと帰る。

ネクタイを緩め、シャツをカゴに放り投げる。

シャワーを浴び、トランクス一枚にバスタオルを背中に引っ掛けた状態で冷蔵庫をあさる。

ビールの缶を取り出し、あおる。

苦くて冷たい液体が体中に広がり、外の暑さを忘れさせてくれる。

親父臭いが至福のひと時を過ごしていると、不躰なチャイムの音が鳴った。

そのままの格好でワンルームの玄関までいき、無言で覗き窓をみる。誰もが見惚れるような笑顔をした、元彼女が一分の隙もない格好で立っていた。

思案して、シャツと短パンだけをとりあえず身につけてドアを開ける。

チェーンをしたままで、それでも僅かしかない隙間から、彼女の香水の匂いがこちらへ届く。

「相談したいことがあって」

「力不足だから他をあたってくれないか？」

あまり彼女にしたことがない態度をとったせいなのか、完璧な笑顔が少しだけ曇る。

「学しか頼れなくて」

「旦那がいるだろ？」

自慢の旦那が、と付け加えようとしてやめた。

それでは、自分がまるで嫉妬しているみたいだ。

「ちょっと、でも、少しだけ」

言葉を濁しながら、からめ取るような仕草をする。彼女が瞬きをするたびに、甘えた気配が濃厚になっていく。

そういえば、彼女はそうだったな、と思い出す。

いや、正確には思い知らされる。

姉妹がいる友人たちは、彼女の事を割りと冷たく判断していたはずだ。

あれは全て擬態であると。

そのときにはまるでわからなかったその意味が、今になって理解できた。

やる気はないとはいえ、難しい年頃の少女たちを数多く見てきたからだろうか。彼女たちはまだ幼いながら、似たような態度をとるところがある。未熟さゆえのつたなさから、生徒たちのそれはまだかわいげがあるものの、元恋人のそれはまるでかわいげがない。

あんなに未練がましく彼女のメールが来るたびに一喜一憂していた自分が信じられない。

吹っ切れたあとは、なかったことにしたいほどだ。

「ねえ」

女の煮詰めたの、と友人は彼女の事を評したことがあるが、確かにそれ以外現しようがない態度で甘えをみせる。

「悪いけど他あたって」

まるで他人のように、いや実際他人なのだけど、彼女を拒絶し、空間も遮断する。

閉じられたドアの向こうには声を荒げることなどない彼女が、唯一感情を表すかのように強いヒールの音をさせて去っていった。ため息をついてベッドに腰掛ける。

勢いよく大の字になって天井を見上げる。

自分に対して影響を与えることがなかったことに、安堵した。

どんなことがあっても日常は淡々と続いていく。

まして勤め人ならば、こなさなければ明日にも困る。

社会人の無駄な憂いになど気がつくはずもなく、彼ら彼女たちは無邪気に学校という箱の中に集まっている。

「今帰るか？」

すっかりと暗くなった空を指しながら、偶然校外へと続く道で出会った鈴木に尋ねる。

彼女は帰宅部だが図書室通いが常で、帰りが遅いのも頷けるが、それにしても閉館時間を考えればやや遅い。そこまで考えて、すっかり一生徒である鈴木の行動の一端を把握している自分に驚いた。

「ええ、はい」

曖昧に笑って、見上げる。

色素の薄い髪に、瞳。

それが人工ではなくて天然だということは、近づけばよくわかる。そして、その目鼻立ちのせいで無駄に派手な印象を与える彼女の顔立ちも、近づいて見てみれば最低限の化粧しかしていないことに気がつく。

そんなことを知らなかった頃は、ただ彼女を浮ついた女子生徒の一人だと認識していた。

携帯を片手に無意味に友達と話している方が似合う彼女が、図書室にいたから驚いた。

だから気になった。

ただそれだけだ。

自分がしていたイレギュラーな行動をなかったことにして、そう判断を下す。

「大丈夫か？」

自分の質問の意味がわからなかったのか、見上げたまま鈴木は首をかしげる。その仕草が小動物じみていて、思わず撫で回したくなる。どちらかというと大人びた印象を与える彼女が、こんな雰囲気撒き散らすのはアンバランスでよくわからない引力のようなものを感じてしまう。

「夜も遅いし」

「そうですね」

一向にこちらの意図を解しないのはわざとなのか天然なのか。

図々しい子供たちなら、とくに甘えの一つも出てくるものなのに、鈴木はそういう素振りを一切みせてこない。

そっという子たちが苦手だったくせに、自分でもわけがわからないこ

を思っていることだけは理解している。

「何してた？」

責めるような口調は、教師らしくもありらしくもない。
だが、鈴木はあくまでさりとそれを交わしていく。

「勉強、とか？」

こうみえて彼女の成績は悪くはない。目を見張るほどよくもないが、どこにでもいる平均的にできる少女、というのは実はどこにでもいるわけではなく、彼女ほどほどに出来て出来ない生徒は実は少数派だ。

大抵得意な教科が出来ない教科を穴埋めする格好で平均値を形作る。そんなことに気がついてるのは、自分だけなのかもしれないが、気がつけば、彼女のことを詳細に知る自分がいる。

そんなつもりはなかったのだという言い訳すら出来ないほどに。

「進路は決めたのか？」

無難な言葉を口にする。

それがただだけ自分という教師らしくなくとも。

「さあ」

だが帰ってきたのは他人事のような一言だった。
まるで突き放されたかのように、鈴木は口を引き締め押し黙ってしまった。

この頃の子供たちは不安定だ。
未来や将来に不安に思うのは少女「らしい」とも言える。

歳相応の一面を垣間見て、安堵と同時に寂しさが支配する。その感傷的な気持ちは、鈴木の一言で唐突に終了された。

「先生、さようなら」

彼女は何かに気がついたのか、校門のあたりで蠢く物体に手を振り、挨拶をして走っていった。

それが成人男性だと気がついたときには、僕はどうしても両手の拳を強く握り締めていた。

笑い声など聞こえるはずもない距離で、それが聞こえてきそうな錯覚に陥る。

見えなくなるまで、いや、見えなくなっても鈴木が歩いていった方向を見つめたまま立ちすくんでいた。

ようやく、もう誰もいないただの暗がりだと頭が認識した頃、のろのろと帰宅すべく駐車場へと歩き始めた。よくわからない気持ちに支配されながら。

元彼女とのやりとりで神経がささくれだっていただけだと、言い聞かせる。

だけど浮かんでは消えるのは誰かの顔で、それはこの暑さが見せたただの幻だと言いつた。

十月・食べる？

気がついたら保健室にいて、まず最初にやってしまったと思った。亮太が忙しくて、ここ数日はんを一緒に食べなかったせいだ。

夜はかろうじて同じ部屋で過ごせたけれど、あまりわがままを言うわけにはいかない。

だから、それこそ適当に口に放りこめるものだけを食べていたのだけど、食に興味がないわたしだとどうしてもとらなさ過ぎてしまうのだ。

だからこれは、単なる栄養不足による貧血みたいなものだけど、学校側は容赦なく保護者に連絡をとってしまうだろう。

それが保護者とはとても呼べない人たちであっても、面倒くさいことに巻き込まれてしまうのがいやだ。

「少し顔色よくなってきたわねえ」

ふくよかな体つきに、たれ目の優しい顔立ちをした保健の先生は、まるで普通のお母さんのように生徒たちに慕われている存在だ。

あまり大人が得意ではないわたしも、この人の近くはちよつとだけ安心をする。

やさしい声をかけられ、緩められたブラウスを締めながら笑顔を作る。

手を出しなさい、と言われておとなしく右手を差し出したら、チョコレートを渡された。

「とりあえずそれでも食べときなさい、何かおなかに入れないと。内緒だけどね」

片目をつぶって言う先生は、どこかわいらしい。

黙ったままうなずいて、おとなしくチョコを口にする。

少し冷まされたお茶を飲みながら、他愛もない会話をする。先生はそういうところから色々なことを探ろうとしているのだろうけど、はぐらかしながらも、会話は楽しんでいる。

そういう術だけが上達していく自分に嫌気がさしながらも。

「ん？鈴木か？妙なところで会うな」

女同士の話に邪魔者が入り、中断される。

「古瀬先生」

見知ったような知らないような、わたしの中でよくわからないポジションにいる先生が、ゆうゆうと私たちを見下ろしていた。

どうしてこんなところに、という疑問が顔に出すぎていたのか、先生は左手をひらひらふってこちらに見せた。

左手の中指に巻きつけられた布と、それに染み付いている鮮やかな赤色。

あちこちに飛び散ったその色は、見た目にものすごいインパクトがある。

思わず口を押さえた私を保健の先生は反対方向に向け、古瀬先生をどなりつける。

「あまりそういうものは見せないでください！特にこういう子には！！！！」

叱れた格好になる先生は、その迫力に押され、おとなしく誤りながら手当てを受けているようだ。

背中側から器具を扱う音がして、情けない先生の声がする。

「はい、終わった。刃物の傷だから治りは早いと思うよ」
「ありがとうございます」

先生のお礼の声が聞こえて、ようやくわたしはそちらに向きなおした。

「先生、大丈夫？」

全く知らない中ではない人に対して、何も言わないのもあれだろうと、わたしらしくないことをたずねる。

「怪我そのものはたいしたことない。ちょっと面倒くさいけど」

確かに利き手ではないとはいえ、指を怪我したら日常生活が色々と面倒くさいだろう。

「あ、でも先生、彼女さんとかに色々してもらったら」

軽い口調で、からかうように続けたら、先生が不機嫌になった。

「悪いけど、今はいないんで」

ぶすつとして言い訳をするように返す先生は、幼くて少しかわいい。

「あら、あんた恋人の一人や二人いないの？いい年してなさけないねえ」

強く背中を叩かれながら、古瀬先生をからかう。そういうときのこの人はとても楽しそうだ。

「すみませんね。そんなことより鈴木はどうしてここに？」

だけど、古瀬先生はあっという間に距離をとって、わたしへと注意を向ける。

彼はそういうところが他者に対してとても素っ気無い。

「まあ、ちょっと」

暗に女の子は色々ありますよ、ということをも濁しながら察してもらう。

もちろん原因は違うけど、それを保健の先生が鈴木先生に告げ口することはないだろうとふむ。

案の定先生は、困った顔をして目を逸らした。

わたしはタイミングだとばかりに、お礼を言って授業に戻ることにした。

どういうわけか一緒に退室した古瀬先生は、途中までだが同道することになった。

「早退しなくていいのか？」

「たいしたことないですから」

曖昧にしたまま、嘘はついていないと彼の目を覗き込むようにして見上げる。

こういうときは身長差が辛い。

「先生こそ気をつけてくださいね」

階段を上がる先生と、あがらないわたし。別れ道で手を振る。

ふいに先生の手がわたしのブラウスの襟首を掴む。

ちよっとした抵抗感でゆっくりと振り返り、先生を改めて見上げる。

「いや、ごめん、なんでもない」

黙ったまま、数秒見つめていた視線をはずし、おもむろにポケットから何かを取り出した。

はい、といって渡されたそれは小さな飴で、あまりに唐突な彼の行動に疑問符だけが頭に浮かんでいる。

「もつと食べる」

先生はそれだけを言って、階段を走りあがっていった。

先生が触れた襟首を直しながら、よくわからない感情が広がっていった。

苦いような痛いような、よくつかめない感情を持て余しながら、わたしは教室へと帰っていった。

「そついうところは母親そっくりなのね」

久しぶりに亮太に会って、晩御飯の買い物をして自宅へ行くと、珍しい人物が玄関の前に立っていた。

わたしと隣に立つ亮太を見比べながら蔑むような視線を寄越すのは、父方の祖母だ。

おばあちゃん、と親しげに呼んだこともない彼女は、実母に顔が似ているわたしを嫌い抜いている。

そもそもこの人は、父の前の恋人のことが気にいっていたらしい。母の親友でもあったその人は、母には似ず、堅実でかわいらしい人だった、ようだ。

そんな彼女から肩書きだけはエリートな父親を略奪して結婚した母を気に入るはずはない。ましてわたしを妊娠することで、それに成功したという実母のことを。

わたしから言わせれば、されるほうもされるほうで、あっさりそんな女にひっかかる野郎も悪いのだと、実父なのに言いたくもない悪態を心の中でつく。

わたしの中の緊張感を感じとったのか、亮太は意地の悪い笑みを浮かべ、祖母に丁寧にあやづをした。

「はじめまして、秋音さんの家庭教師をしている高井と申します」
「家庭教師？」

いかにも胡散臭い、といった顔をした祖母は、しかし亮太の学生証の印をみて、途端に態度を変えた。

「あら、まあ。こんな優秀な人が」

肩書きだとか権威だとか学歴だとかに弱い祖母は、彼の所属大学の名前であっけなく納得させられたようだ。
ひとしきりわたしに生活態度を注意する小言をくれて、あっさりと引き上げていってくれた。

「ありがとう」

一言も口が聞けなかったわたしに代わり、適当に相手をしてくれた亮太に感謝をする。

彼女たちのことなどどうでもいい、と毒づきながら、わたしは彼女たちに反抗のひとつもできなかったことがない。

それは、刷り込みのようなものなのかもしれない。

足が震え、声もでないわたしは、普段強がっている分ひどく滑稽だ。

「メシにするか、とりあえず」
「うん」

わたしが今日倒れてしまったことがばれた後では、その提案を却下する勇氣はない。

「で、そのあと勉強な」
「それは、ちよつと」

怒ったような顔をした彼は、彼の刑事だという父親にそっくりで、とても怖い。

「逃げられると思ってるのか？」
「そういうわけでは」

戯れながらのやり取りはいつもどおりで、だけどポケットにしまつてある飴の存在に、わたしは素直に入り込んでいくことができなかった。

亮太との過ごす時間をはじめて落ち着かないと思つてしまった。

十一月・金色木枯し

「何の用です？」

怪我をして以来用もないのに保健室を訪ね、部屋の主である尾形先生に不振がられている。

それでも市販の菓子を手土産にすれば、彼女は茶を入れ、一時ほど相手にしてくれる。

「何か聞きたいことがあるんじゃないの？」

あからさまに疑惑の目を向けられ、目が合わせられない自分は、犬で言えば弱いオスのようだ。

最初のうちはそれでも、絆創膏をもらいにきただのといういい訳があつた自分も、すっかり治ってしまった傷跡を前にして言いつくろ言葉すらない。

「鈴木のことなんですけど」

あれから彼女は幾度かここに運ばれたという噂を聞いた。

違うクラスの生徒が、それでも保健室に何度も運ばれるという事態となれば耳に入るといふものだ。

さらには、どうも彼女の保護者そのものが職員たちの口の端に上る相手なのだから仕方がないだろう。

過保護で学校に言いがかりをつけてくる保護者は具体的に困ってしまつが、彼女の場合はその逆らしい。

何度連絡しても両親にたどり着くことはなく、また保護者の代理だという人間も、大して興味が無い風に担任の言葉を聞き流しているらしい。

介入するほどではなく、だからといってまるきり心情的にも無視できるものではない。微妙なラインの上を歩いているような鈴木に、多少の注目が集まっている。

「栄養不足ね。具体的には」

「栄養不足？」

「担任には伝えてあるけど」

あっさりと鈴木の状態を口にした尾形先生は、忌々しいという顔を
した。

それはおそらく、彼女の保護者に対するものなのだろう。

「あとは寝不足」

彼女が授業中によく寝てしまう、という話は聞いたことがない。万年寝不足のような年代で、それは少し奇異に思える。

「気になるの？」

「そういつわけでは」

自分から聞いておいてそれはない、というほど情けない返事をし、
言い訳すら思いつかないで黙り込む。

こんなことを聞いて回る自分はおかしい。

そんなことは自分が一番よくわかっている。

「在学中は手を出さないでね」

につこりと笑顔で釘をさす尾形先生は、目は真剣だ。

おそらく在籍中にそのような例を幾度となく見ているのだろう。

自分ですら、数年内にそういったことにいたった例をいくつか上げ

られるほどだ。

「彼氏が、いるみたいですよ」

さされた内容には直接答えず、そんなことを尾形先生に伝える。

暑い最中に寄り添うようにして鈴木と一緒に帰った相手は、たぶんそうなのだろう。

彼女が普段周囲に接する距離感とは違う近いそれに、それ以上の答えはないはずだ。

ただ言葉にしてみても、自分の中のどこかが痛んだ。

「へえ、あの子でもそういう相手がいるんだ」

心底驚いた尾形先生に、へらりとした笑顔を向ける。

気がつかれないように、保健室を後にした。

申し訳程度に、新しい絆創膏を一枚手にして。

一人で落ち葉の上を歩いていた鈴木を見つけ、思わず歩き出して
いた。

不自然にならないように、いや、どこからみても不自然ではあるが、
彼女に声をかける。

「帰りか？」

「そうですけど」

かばんを肩に掛け、校門へと歩いている姿を見て、それ以外の何が
言えるのかと心の中で突っ込みを入れる。

そんな葛藤などに当然気がつくはずもなく、彼女は歩みを止めるこ

とはない。

「仕事終わっただんですか？」

どこまでも素っ気無い態度を崩さない彼女は、こちらを見ることもしない。

今までより幾分突き放された態度にためらう。

内心どんなことを思っていたのかは知る由もないが、少なくとも彼女は笑いかけてくれていたのだから。

「あれ、彼氏か？」

「あれ？」

ようやくこちらに顔を向けた彼女は、いやそうな顔をしていた。

だけど、どちら側でも表情を見せてくれた、ということに喜んだ自分は、いつもの自分では考えられないくらい他者に踏み込んでいく。

「夏にあそこで待ち合わせてた」

校門の方を指した自分に、彼女はしばらく考え込んでようやく思い当たる節があったようだ。

「ああ、亮太」

下の名前を呼んだ彼女に、軽く嫉妬を覚えた。

自分は古瀬「先生」であり、それ以外の何者でもない。それどころか下の名前を知っているかすらあやしいところだ。

「違う」

彼女にとっては理不尽な気持ちに埋め尽くされようとしている自分に、否定の言葉が届く。

それが、どういう風に自分に思われるかも知らずに、鈴木は淡々と説明をしていく。

「あの人は恋人じゃない。保護者みたいなもの」
「保護者」

「兄みたいで父みたいで、弟みたいな人」

それは大切な何かをあわせたような人みたいじゃないか、と、鈴木
の言葉を理解できないでいる。

「そういうわけだから、亮太は恋人でもなんでもない」

再び呼んだ名前に、明らかに嫉妬した。

僕は、名前では呼んでもらえない。

もうその気持ちがどこからくるのかは、はっきりとわかることができた。

「さよなら、先生」

言いたいことを言って満足したのか、鈴木はいつもみたいに去って
いこうとした。

咄嗟に彼女の右手を掴む。

びくりと体を震わせて、彼女は前を向いたまま固まっていた。

「鈴木は、僕の名前を知ってる？」

強い風が吹き付け、地面に落ちた色とりどりの葉を巻き上げていく。
視界の中に幾枚もの落ち葉が舞いあがり、降りていく。

「学」

僕の名前を呟き、離された右手を左手で掴みながら彼女は歩いていった。

再び風が吹き、落ち葉が舞い散っていった。

十二月・春になったら、

亮太との生活は相変わらずで、わたしは誰にも干渉されずに暮らしていている。

父も母も、それぞれの恋人との生活が忙しいらしく、わたしにかまってくる気配すらない。

そんな中で、時折現れる亮太のお父さんとのやりとりは珍しくて嬉しい。

放置されていた、とはいえ亮太はちゃんと愛されている。
そんな事実にしほこんだ。

「いいかげん抵抗はよせ」

亮太は、わたしを同じ大学へ進学させることに執着している。

確かに近いし、学費は安いし、きっと祖母あたりは狂喜して喜んでくれるだろう。おおよそ外面でしか判断できない彼らはにとって、その肩書きは誇れるものだからだ。

だからといってそれを喜んでいられるほどわたしは子供のままじゃない。

「勉強嫌いだし」

「やってみたら楽しいかもしれないじゃん」

「そんな楽観的な予想だけじゃ」

「大丈夫だって」

正直、わたしは勉強が好きじゃないし、目的を見つけれないでいる。

亮太は早くからそのあたりは割り切っていたようだけど、わたしはそうじゃない。

彼の提案にいつまでたつても首を立てに振らないものの、それでも根気よくわたしをそちらの方向へ向けるように努力している。

「卒業したら一緒に暮らすか？」

さりげなく呟かれた亮太の言葉に、わたしは咄嗟に何も答えられなかった。

亮太と暮らす毎日は、きっと穏やかなものだろう。

想像して、あまりにもしっくりきて、でも返事をする事ができないでいる。

「そこまで甘えてられないよ」

ようやく搾り出した答えは、亮太にとっては不愉快なものだったようだ。一瞬表情をなくして、でもすぐいつもの彼に戻っていった。それ以上その話を続けることなく、同じ夜が過ぎていく。いつのまにかあたりまえだと思ってしまっていた毎日が、そうじゃないのだと思い知らされた。

「進路の紙出してないんだって？」

図書室で話しかけてきた人は、ここのところわたしに何かと絡んでくることが多い古瀬先生だ。

避けることができるのに、それをしないわたしの気持ちは、自分が一番よくわかっていない。

「就職するならするで準備がいると思うけど」

確かに先生の言うことは正論だ。

こんな時代に中途半端なわたしがきちんと就職することは簡単なはずはない。

わかりきったことを、よくわからない距離感で迫ってくる人に言い聞かされ、わたしは意味もなく反抗心をもつ。

そんなわたしの内心などおかまいなしに、先生はわたしが現実拒否をするための本を前に小言を繰り出す。

うつとうしくて、でも、どこかわかっていたことで言い返すこともできない。

「まあ、そう言ってもわかんないわな」

そのまま黙って先生は本を持って遠ざかっていった。
将来なりたいもの。

わたしはいつでも逃げることはかりを考えて、具体的にそれらの手段を考えたことはなかった。

ただ辛くて、逃げたくて。

そこに亮太がいたから逃げ込んで。

ずるいだけの自分が、ものすごく嫌いになった。

「秋音ちゃんって、古瀬先生と付き合ってるの？」

「え？」

クラスメイトと四人で輪になって昼ごはんを食べていたら、そんなことを聞かれた。

びっくりしすぎて思わずパンに喉が詰まったわたしに、他の子たちがあわててお茶だのを差し出してくれる。

「どうして？」

それはどうしてそんなことを思ったのか、だの、どうしてそんな風に見えたのかとか色々な意味が込められた言葉だったのだけど、友達はその意図に気がついたのか、つらつらと説明をしてくれた。

「一緒に校庭歩いてたって聞いたし」

「いや、偶然だけど」

「腕組んでたって」

「勘違い」

「大体物理の先生なのにどうして図書館で頻繁に目撃されるわけ？」

「本好きなんじゃないの？」

彼女が聞いたというその裏づけに、わたしは反論していく。

「まあ、私もただの噂だとは思えないんだけど」

そう舌をだして、彼女がただわたしをからかっていたことがわかる。あまりそういう話がないわたしに振って沸いた面白い話だから、さっそく餌食にしただけなのだろう。

だけど、本人に噂が届くということは、その噂はかなり広がってしまっただとだ。

わたしは良いとして、古瀬先生はそんな噂を立てられてひどく迷惑しているに違いない。

「秋音って彼氏いるし」

「そっいえば」

噂を聞きつけた友達が、あっさりと他の友人の言葉に頷く。

たぶんそれは亮太のことを言っているのだろうけど、わたしは保身のため曖昧に頷いた。

「でも先生の方は軽く注意されたって聞いたけど」

「それ、ほんと？」

「まあ、あんなことがあつたからね」

在学中の女子生徒が妊娠して、卒業とともにこの先生と結婚したことは在学生なら誰もが知る有名な話だ。かなりおおっぴらに関係を持っていた二人は、あっさりと離婚して別の相手とくっついたり離れたりをしているらしい。そんなことまで噂に登るのは、ここが人口の割には田舎だからだろう。

「なんでだろう？」

わたしと、古瀬先生が噂をされる理由がわからなくて、素直に疑問を口にする。

「そりゃあ、あんたと先生って何の接点もない割には一緒に目撃されてるし」

「そもそもあの先生って生徒近寄せないじゃん、一切」

それは今でもそうで、先生の周囲にわたし以外の子がいたことはなかった。

「ただ珍しいってだけでしょ？ 本当じゃないんだからそのうち落ち着くって。それに来年は違う学年かもしれないし」

暗に来年には古瀬先生が他の学年へと回される、ということを入めかして慰められる。気がつけばみんなのこはんはそれぞれの胃の中

におさまっていた。食べる気をなくした私は、食べかけでもよいという友人にパンを渡す。

あちこちに飛ぶ会話に相槌を打ちながら、わたしはぼんやりと先生の事を考えていた。

「先生、大丈夫？」

噂を聞いて、それでも先生には届いていないのかもしれない、図書室に偶然現れた先生にそんなことを尋ねる。

難しそうな本を手にしていた先生は、わからない、という顔をしてこちらを見下ろした。

あんなことを聞いたせいなのか、常連たちの視線がこちらに向いているような気がしてしまう。ただの自意識過剰だと思い直そうとしているけど。

「なんでもない」

だけどこんなところで直接先生に言いつけることもできなくて、適当に会話を区切る。

誰が見ているかもわからない場所で個人的に話しかけるのは、やっぱりよくないだろう。

口をつぐんだわたしの目の前に、先生は持っていた本を置いた。

「これ、おもしろかった」

タイトルからわたしが好む本とは違って、首をひねる。

意図をつかめないまま、先生はその本を置いて帰っていつてしまっ

た。

代わりに返しておけ、ということなのかと、それでも一応本をめくる。

中に入っていた一枚のメモに、走り書きをみつける。

それが、先生の携帯番号だと気がつき、大げさにならないよう周囲に視線を走らせる。

常連たちは、黙々と本だけをめくっている。

それに安堵して、メモを丸めてポケットの中へと突っ込む。

なんでもない顔をして、わたしはその本を係へとわたす。

あっさりと返却手続きがなされ、内心のあせりをみせないようにしながら席へと戻る。

ポケットの中のメモを確認する。

心がざわめくような感覚を始めて味わった。

亮太のいない家で、わたしは珍しく一人でいた。

生活感のない部屋のベッドの上で、天井を眺める。

外は暗くなって、部屋の中も真っ暗になる。

制服のまま、随分とその姿勢で寝転がっていたわたしは、意を決して握っていた携帯を開く。

画面からの光がぼんやりとわたしの周辺だけを照らす。

かちかちとボタンを押し、短い文章を作る。

入力してあるアドレスにそれを送る。

送信された、という画面から待ち受けに戻り、それを睨みつける。

やがてバグライトが消灯し、周囲は再び暗くなっていく。

ようやう放り投げた携帯に、着信の知らせが届く。

起き上がり、ベッドの上に座りなおして携帯を開く。

予想した人からの返信に、わたしは嬉しくなる。

数回にわたるやり取りのあと、わたしは携帯を握ったまま眠りについていた。

その日、わたしははじめて誰もいないのに安心して眠りにつくことができた。

春になったら二人で菜の花を見に行く夢をみながら。

一月・雪の夜

底冷えのする冬の日に外を歩くなど冗談じゃない。

そんな愚痴を思いながら友人との飲み会の場へと急ぐ。

ただでさえ年末年始は酒の席が多いが、今日は完全プライベートで友人との楽しみだ。沈み込みそうになる気持ちを、温かい鍋料理を想像しながら凌ぐ。

ようやくたどり着いた店で、名前を告げ部屋へと案内される。

自分を含めて四人だが、まとめ役は個室をとってくれていたようだ。コートを脱ぎ、脇にかかえながら襖を開ける。

中にはすでに準備をされ温かな湯気さえでている土鍋と、それを見ながら我慢比べをしているような友人たちが待ち受けていた。

「遅い！」

非難の声に、片手をあげる。

空いていた席に座り、すぐに運ばれてきたビールで乾杯の音頭をとる。

ひとしきり食べ、飲み、話しながら、話題はあちこちへと広がっていく。

「そういえば、あれ離婚するらしいけど」

ちらり、と申し訳なさそうな視線を送られ、左斜め前の男を見る。

「まあ、当然だな」

すっかり吹っ切れた自分は、元恋人の話題に対して素っ気無い答を返す。

それ以上言うことも思ふこともない。

あれほど執着していた心はどこかへキレイさっぱりと飛んでいき、代わりにあるのは嫌悪感だ。長所に思えていたことが、短い間で短所となり、さらにはそれに付き合っただけで粘着していた自分の気持ちすらどこかへ放り投げ出したくなる始末だ。

「あの女なら次もそこそこの男捕まえられるだろう。まあ間抜けだが」

口の悪い友人が、あれにひっかかった自分を揶揄する。その通りだからこれには全く反論ができないでいる。

「そういえば、おまえ彼女できたん？」

「なんで？」

全くそういう話題をかけらも出していない自分に向けられた疑惑に質問を返す。

何も変わらない自分にそんなことを思ふ理由がわからないと。

「だって、携帯気にしてるし」

言われてようやく、この部屋に来て幾度か着信を確認していたことに気がつく。

無意識にやっていたそれが、ここにいる連中に感づかれるほど頻度がたかかったことに愕然とする。

「そういうわけじゃない」

「否定もなしか」

わけありと踏まれたのか、彼らの視線が好奇心を帯びてくる。

そういうところは未だ学生気分であり、男同士でもこの手の話題は食いつきがいい。

「女子高生に手をだしちゃいけませんよー、先生」

一人のからかいの言葉に、油断をしていた自分は思わず反応をする。ぎくりと振るわせた手に、彼らの視線が集中する。

「まじか？」

「犯罪だろ？」

「えっと、ロリ？」

三者三様の反応を見せる彼らは、どこまでも楽しんでいる。

「まだ違うって」

「まだってことはいずれはって思ってるってことだろ？」

拳句酔った自分の隙を酔っ払いたちは許してくれない。

「ただの生徒」

「ああ、やっぱり学生だったんだ」

自分たちの推測があたったのがおもしろいのか、わけもなく彼らは笑い続けている。

「だから、ただの一生徒だって」

「最近の高校の先生は生徒とプライベートアドを教えあうんか？」

「それは、人によるけど」

気軽に高校生たちとやりとりをしている教師がいるにはいる。尾形

先生などはキャラクターと仕事柄、悩み相談のため頻繁にやりとりをしているそうだ。他の教科担任にしても、気軽な性格をしている若い連中は、携帯をツールとして扱っている人も多い。

だが、この職に情熱を注ぐつもりも、彼らの人生に首を突っ込むつもりもない自分は、そういうわずらわしいやりとりを一切排除していた。

自分の性格を把握している彼らが、今更情熱的な教師に変貌したとも思ってもいない彼らに、こんな言い訳が通用するはずもない。

「子供は作るなよ」

そんなからかいの言葉を叫んだやつを軽くはたき、最近飲み始めた焼酎を飲み干す。

やがて興味が薄れたのか、頭髮の悩みやらメタボリックの話題やらにうつっていき、完全な馬鹿話を楽しむ場となっていた。

二次会三次会と続いた楽しい飲み会は、二日酔いを代償としておいしく結果となった。

夜空でもわかるほど分厚い雲が垂れ込め、底冷えのする寒さが道路を覆う中、家へと急いでいた。

仕事は減らず、だからといって人員が増えるわけではない毎日の中、あまりにも無沙汰をした実家からの呼び出しに応じた帰りだ。

両手には親の愛情だか干渉だかよくわからないものをぶらさげ、余計なものを持たされないうために車でいかなかったことを後悔した。そんなことを斟酌するような人たちなら、自分の足はもう少しあそこへ向いていただろう、と。

ただ少し先の地面だけをみながら、黙々と歩みを進める。

誰も知らない通行人は、それでも馴染んだ光景で、頭の中にただ風景のように通過していく。

そんな中、わずかなひっかかりを覚え、不意に顔を上げる。

知っている、はずの背中が視界に飛び込み、思わず理性も何もなく声を上げる。

「鈴木」

何度呼んだかわからない彼女の名前を、人ごみの中で呼ぶ。

フリースにジーンズというどこにでもいそうで、年頃の割には酷く地味な格好をした彼女が振り向く。

「先生」

小さく頭を下げて、彼女はその場に立ち止まる。

周囲は少しだけ不審な目を向け、すぐに進行方向を向いて歩き去っていった。

「買い物か？」

「そんなところですよ」

午後九時を回るのに買い物もないだろうとは思うものの、それ以上踏み込まれなくなさそうな鈴木の状態にそれを控える。

彼女は、ひどく曖昧で、だけど突き放したような答えを返すことが多い。

それは距離を保っていたいという心の現われのようで、そういうタイプであつた自分を棚に上げるのもなんだが、寂しいと感じてしまう。

親の事を尋ねようとして、彼女の保護者が一時期話題になっていたことを思い出す。

まるで関心がないかのような受け答えは、クレーマーよりも問題になりにくく、鈴木の様子が落ち着いたことも相まって、最近ではほとんど口に出す職員もいなくなってしまったが、こんな場所にこんな風に歩いていることからみて、確かに放任を通り越して放置しているのだろう、彼女の事を。

「家に帰るのなら送ってくが」

彼女はこちらを見上げ、そして首を振った。

さらに食い下がるうとした自分に、彼女はようやく口を開いた。

「雪・・・・・・・・」

そう呟いて鈴木は空を見上げた。

夜空を重苦しい雲がいつのまにか被っていて、そこからちらちらと白い雪が落ちてきていた。

「もう帰れ」

「ん」

口数が少ない鈴木のあとを歩いていく。時折隣に立ち、覗き込んだ顔にはまるで表情がない。

それが物理的な寒さからくるものならばいい。

そんなことに考えをめぐらしていたら、思いもよらない言葉が飛び出していた。

「行くとこないなら、家にくるか？」

完全に足を止め、鈴木がこちらを見上げる。

彼女の保護者のことも、恋人のことも、今の自分には思いつくこと

がで^がきないでいた。

や^ががて彼女は静かに頷き、僕ははじめて彼女を家に泊めた。

二月・マフラー

最近のお昼休みは、ご飯をさっさと済ませた女の子たちがただひたすら作業に没頭する時間となっている。

どういうわけかバレンタインに手編みのものを添える、ということがブームとなってしまうたうちのクラスでは、そういうものがおおよそ似合わないグループですら編み針だのかぎ針だのを手にしている。慣れない作業は当然口数も減って、現在教室では三分の一ほどの女子が、ただひたすら本と物体に格闘している。

わたしは当然三分の二に該当していて、友達がせつせと編んでいる横で、ちまちまとパンをちぎっては口に運んでいる。

「秋音はいいわけ？」

思ったより難しかったせいなのか、不機嫌で厳しい顔をした友達がわたしを巻き込もうとする。

刺激しないように首を振って、食べることに忙しいとアピールをする。

「でもチヨコはあげるんでしょ？」

亮太の事を指しているのだろう。

最近会っていない彼のことを思い出しておなかが痛くなった。

先生の家に泊めてもらったのは一度だけだ。

適度に生活感があつて、適度にキレイにしている家は、はじめてなのにもすごく馴染んだ。

そして先生の隣も。

亮太とは違う背中も匂いも、何もかも違うのに与えてくれる安心感だけは同じだった。

ただわたしの胸の中でちりちりと焦げるような思いがして、安心するのによたらとときどきもした。それはあまり知らない男の人の家にいるせいだと言い聞かせただけ。

思い浮かべる顔が亮太から先生になって、あわててお茶を飲む。

「一緒に買いに行こうねえ」

そこは手作り、というわけではない友達たちがそう言いあいながら、わたしもその波に飲み込まれた。

今年のバレンタインは平日で、女の子たちは堂々とかばんの中に入れて学校でターゲットに渡す気なようだ。

なんとなく浮ついた雰囲気の子たちに混じって、わたしも小さなチョコをかばんに入れて登校してしまった。

連行されるようにしていったチョコレート売り場で、あっさりと周囲に流され、わたしはいつのまにかチョコを買ってしまった。たった一つのそれは、誰にわたすのかも考えようとはしないのに、それでもちゃんとこんなところまで持ってきてしまっている。

誰か、を想像して、誰かの顔になるのが怖くて、華やかな女の子たちの間で、ふるふると小さく頭を左右に振る。

そわそわしていたり、無視していたり、そんな男の子の中、友達たちは着実に目当ての人に渡している。あれほど堂々と手渡せる彼女たちの勇喜がうらやましい。

ずっとかばんの中が気になって、それでも渡せるわけもなく、あつという間に一日が終わる。

友達は、ここにはいない人にあげてを想定しているせいなのか、わたしがぼんやりと過ごしていても何も言わない。どちらかと言う

と、さつさと学校から帰ることを望んでいる節がある。
今日はバイトだから、言われなくても即帰るのだけど。
何か言いたそうな友達と別れ、コンビニへと急ぐ。
シフトを増やした今、週に四日はバイトに顔を出すようになった。
今日はお休みだったのだけど、バレンタインやクリスマスはどういうわけかバイトを代わることが多いのだ。
携帯の着信をチェックして、シフトに入る。
すでに半額になったバレンタインチョコを見ないふりをしながら、ただひたすら仕事をみつけて働いた。

「お疲れさまでーす」

できるだけ明るく挨拶をしてレジで買い物をして帰る。

自動ドアをくぐったらあまりにも寒くて思わず首をすくめた。

携帯を取りだしたら、チョコの姿が見えた。

気になって、もう自分で食べてしまおうと覚悟を決めた。

先生から入っていたメールを確認して、内容確かめる。

割とママにやりとりするそれは、今のわたしの支えみたいなものだ。

メール文は短くて、ただ一言、チョコは？と書かれていた。

わたしも短く「いるの？」とだけ書いて返信をする。

すぐさま先生から反応があつて、今度はメールじゃなくて電話の着信音が響いた。

「いるの？」

歩いている人たちから離れ、街路樹が植わっている花壇の端に腰を下す。

地面が冷たくて思わず変な声が出そうになるのを我慢する。

「そりゃあ。欲しいから」

「なんで？」

先生とは、こうやってメールをやりとりしたり会話をしたりする程度の中だ。

泊めてもらったときだって、何かがあったわけじゃない。

きつとかわいそうな子供を保護する気分になったただけだろう。

それは先生のキャラにはとてもじゃないけど合わないことだけど、たまにはそういう気分になることもあるのかもしれない。

「そういえばどこにいるんだ？」

あっさりとかわされ、正直に居場所を伝える。

先生は少し沈黙したあと、すぐそこにいくと言って携帯を切った。

本当にくるとは思えなくて、でもそんなことで嘘をつくタイプでもないだろうと思って、ぼんやりと座り続ける。

夜遅いというのに、それなりに人通りはあって、誰もがこの寒さに足早に家の方向へと歩いている。

やがて一台の車が道路わきに止まり、中から見覚えのある男の人が走ってきた。

「先生」

キヤメル色の布をあっという間に首に巻かれ、それがやたらと手触りのいいマフラーであることがわかる。

やっぱり煽られて手編みなんか編まなくて良かったと、あげるつもりもないのに、そんなことを思う。

せかされて助手席へともぐりこむ。

暖かくて、寒さで肩がこつていたことに気がついた。

「バイトは禁止じゃないがなあ、確かに」

うちの高校は色々ゆるい。

バイトも届けを出せばまともな場所なら許可が下りる。コンビニなどという、普通過ぎるバイト先のわたしは、あっさりとおりの許可で堂々と一年のころから働いている。

「送ればいいのか？」

誰もいない家を思い出して否定したくなる。

わたしの周りは何にも変わっていない。

両親がいないことも、どちらの家もわたしの存在を疎ましく思っていることも。

だけどそれを口に出すのはひどい甘えに思えて、先生には言いたくない。

「近いから暖まったら歩いて帰ります」

「却下」

ただどわたしの返事はすぐに拒否されてしまった。

とりあえずごまかすように、お願いします、と口にする。

「帰りたくないのか？」

「そういうわけではないけど」

直球の質問に答えに困る。

そういえば先生はこの手の話は今までしないでくれたのだと思ひ出す。

「あ、先生、チョコありますよ」

誤魔化すようなわたしの言い方に、それでも先生は最初はびっくりしたような顔をして、次に笑った。
なんとなくその顔が嬉しくて、わたしまで笑顔になる。

「つまらないのですが」

照れくさくて、そんな言い方をしながらバッグから取り出す。
小さくて、でもおいしいと評判のチョコの箱を手渡す。

「ありがとう」

誰からももらわないと評判の先生があつさりと受け取ってくれる。
そのわけを聞きたくて、でもやっぱり聞きたくないからへらへらと笑う。

「家、くるか？」

どう答えていいのかわからなくてずるいけど黙る。
帰りたいわけじゃない。

でも、先生の家に行つてはいけない。

心の中では答えなんかとつくに決まっていて、それでも答えないわたしはどこまでもずるい子供だ。

先生がかけてくれたマフラーは、この日からわたしのものになった。

先生にもらったマフラーを巻いて家に帰る。

あたりまえの道が、あたりまえじゃないような気がして嬉しくなる。コンビニのバイト帰り、真っ暗な道を歩く。

亮太が忙しいことをいいことに、わたしは彼と連絡をとらないようにしている。

亮太を見て、わたしは何を言えばいいのか。

確かなことなんか一つもなくて、でも後ろめたさだけは残る。

消極的な解決法に逃げ込んだわたしを、誰かは許さなかったのかも
しれない。

お酒の匂いをさせた亮太が、家の前で待ち構えていた。

亮太をみて、申し訳なさ以外の気持ちかわいてこない。

「久しぶり」

「・・・・・・うん」

言うことがなくて、わたしは視線をはずして黙る。

亮太がわたしの方へと歩いてくる。近づく距離に、足がすくみそうになる。

わたしは、男の人が苦手だ。

だけど、亮太を怖いと思ったことなど一度もない。

それなのに。

混乱して、言葉がでなくて、やっぱり黙ったまま地面を見つめる。

亮太の気配だけを敏感に感じ取りながら、働かない頭で色々な事を考える。

「それ」

彼の手が、わたしの首に触れる。

びくりと体を震わせ、わたしは一步あらずさる。

「どうしたの？」

落ち着いた色のマフラーをつまみ、亮太が尋ねる。

わたしが元々もっていたのは、確かにこれじゃない。それを亮太が知らないはずはない。

答えられないわたしは、うつむいて口を閉じたままだ。

「もらったの？」

亮太の言葉にようやく小さく頷く。

「ふうん、そう」

亮太の右手がわたしの首に添えられていく。わたしのものよりずっと大きな手のひらの感触が、マフラー越しに伝わってくる。

「誰？」

親指に力がかけられる。

それだけでわたしは物理的に声がでなくなる。

「男？」

徐々に加えられていく手の力に、わたしの足は立ちすくんだまま。

勇喜を振り絞って、亮太の顔を見上げる。

焦点の合わない目は、わたしを見ていなくて、だけど憎しみだけは嫌と言っほど感じさせる。

「おまえも、おまえもいなくなるのか？」

亮太の言葉は、段々わたしじゃない誰かに向けられていく。
こんな人は知らない。

「俺を置いていくのか！母さんみたいに！」

彼の絶叫が聞こえる。

追い詰めたのはわたしだ。

縋って、依存して、いらなくなったら捨てたのだ。

一気に絞められた首は、もはや動くこともできなくて、わたしはいつのまにか気絶していた。

気がついたときには誰もいなくて、わたしは一人きり住宅街の道路の真ん中に倒れていた。

冷たくなつた体を無理やり起こし、のろのろと家へと向う。

残された手の痕をみて、わたしは始めて泣いた。

三月・伝えたい

世の中にはホワイトデーなるものがある、ということはもちろん知っている。

そういうやりとりは、嫌というほど身につけられた、歴代の彼女たちによって。

だが、違うのは相手がずっと年下だということだ。

自分がその年頃だったときを思い浮かべてみても、同級生の女子が何を好んでいたのかさっぱりわからない。

ましてそれからたった年月を考えると、的外れ以上のものは出てこないだろう。

そんなくだらないことを考えながらテストの採点を続ける。

ほぼルーチンワークのそれを黙々とこなしながら、あれこれ雑多なものが浮かんで消えていく。

結局仕事が終わるころになっても適当なものは思いつかず、帰宅した。

鈴木がこの部屋に来たのはただ二回きりだ。

そのどちらも多少緊張していた彼女は、それでも自分の隣で穏やかな眠りについた。

まるで保護者と被保護者。

望んだものではないが、今はまだこれでいいとも思っている。

ただ依存されているだけだと指摘されるような関係に、それでもいいから彼女といたいと望んでいる。

バレンタインに比べればどちらかというと地味な行事であるホワイトデーは、あたりまえだがバレンタインと同じ平日だった。

あの日は一日どこか華やいでいて、生徒からの戦利品をこれみよがしに机の上に置いていた教師もいたほどだ。

自分は毎年同じようにすべてシャットアウトしている。

もらうなら平等に、もらわなくても平等に。

理にはかなっている。だからなのか文句も少ない。

チヨコを渡したであろう生徒たちに、軽く絡まれる教師を横目にさつさと家に帰った自分は、どうやら彼女もちで急いでいるのだと勘ぐられてしまった。

そんないいものじゃない。

特定の人物を思い描きながら小さく悪態をついた。

「メシ食ったか？」

二人用のこたつに小さな物体がコタツ布団に顔をうずめるようにして座っている。

いつのまにかここに出入りすることもある鈴木秋音が寛いでいた。向こうの意思でやってくることはない。

どれもみな、僕が水を向けたから、彼女はここに足を踏み入れている。

頷いた彼女は、どう考えても嘘を言っている。

近くで接することが多くなってから気がついたが、彼女は食に関しての欲求が希薄だ。

食べなければ食べないままいつまでもいそうで怖い。

ただ、頻繁に保健室に担ぎ込まれるようでは具合が悪いと自覚しているのか、それを回避する程度に食べている、といった具合だ。

だからこそ餌付けのように、思わず食べやすい何かを用意してしまうのだ。

まるで生命力のない体は、細すぎて折れてしまいそうだ。

もう少し年頃らしくふつくらと、までは無理としてもせめてもう少しましにしたいと思うのは、仕方がないことだろう。

庇護欲とかそういった言葉が頭を掠めるが、断じて否定する。

とりあえず簡単に摘めるクッキーを机の上へ出し、暖かいお茶をそそぐ。

「ありがとうございます」

両手で湯飲みを手にして、ちまちまと茶に口をつける。

「お返し、なんだけど」

「何の？」

呼び出された鈴木は、今日が何の日かすっかり忘れているようだ。確かにらしいといえらしい態度ではある。

「ホワイトデー」

小首をかしげて、携帯の日付を確認する。

「ああ、確かに」

今日がホワイトデーである、という事実を認識した鈴木は、あわてて首を横に振る。

「いいですいいです。お礼だし、それにこれもらったから」

あの日渡したマフラーは、鈴木のものになった。

登下校で彼女の首に巻かれたそれを見て、ひそかに嬉しかった

ことは、とてもじゃないけど知られることはできない。

「まあ、そういうなって」

用意していたものを彼女の手のひらに落とす。

過剰にラッピングされた小さな箱は、やたらと親切な売り場の女性に勧められたものだ。

「これ」

小さいながらも誕生石がついたピアスは、常に彼女がしているものよりは明らかに高級感が漂っている。

この年代の女の子がするならば、今しているものでも十分ではあるが、それだと自分が贈るには不満足だ。

戸惑ったまま固まっている鈴木は、おろおろとピアスとこちらに視線を行き来させている。

おそらく単純にどうしていいのかわからないのだろう。

「先生、これ」

「おまえは気にするな、それでも給料もらってるからな」

彼女のバイト代に比べれば、それはずっともらっているだろう。いや、もらっていないくてはまずい。

それでもためらっている彼女の手を握る。

「せっかく買ってきたんだからもらってくれないと寂しい」

罪悪感を植えつけるような物言いに、ようやく鈴木は承諾した。

「先生、そろそろ」

時計の指差して帰宅することを伝える。
だが、ようやく捕獲した彼女をこのまま帰したくはない。

「誰がいるのか？」

答えがわかりきった質問をする。

あの家には誰もいない。

最近はやうやく、あの男の影がなくなつて、より一層人氣がしなくなつたはずだ。

依存していた彼が消え、新たな依存先としての自分との関係は不安定。曲がりなりにも落ち着いていた環境が、今落ち着きのないものとなっている。

それは僕のせいではあるのだけど、この機に乗じて、何もかも手に入れたくなる自分がいる。

「帰っちゃうの？」

別の角度から攻めたせいで帰りづらくなつたのか、浮きかけていた腰を落とす。

制服ではない彼女の、それでも幼い仕草にこちらに罪悪感が沸いてくる。

「迷惑じゃ、なければ」

こちらを見ないようにしてそう言う彼女が可愛くて、生物としても当然の欲求が頭をもたげる。

それをぎりぎり押さえ込んで、じゃれ合いのようなやりとりが行なわれる。

簡単な一言が伝えられなくて、それでも僕はこの関係に満足してい

た。

鈴木はようやく進路希望の書類を提出し、彼女たちの学年もそろそろ受験のシーズンへの準備を始めていった。

おおっぴらに外で会うわけにもいかず、だからといって頻繁に呼び出すこともできない立場の自分は、図書室通いは控え、地味にメルでやりとりをしている。

どういうわけか、いや、ある意味あたってはいるのだが、鈴木との関係を取りざたされ、口頭で注意された身分だ。おとなしくしているに越したことはない。

短い文のやりとりにも満足し、自分がこんなにまめだったことに驚く。

会えない分、こういうところで発散させている、ということにしておく。

何気なくやりとりをし、彼女の志望校を知った自分は、思わず大声を出していた。

ボタンひとつを押す作業さえもどかしく、彼女の携帯に電話をする。

「今のほんと？」

「ほんとだけど」

砕けた口調になってきた鈴木が、ためらいなく言い切る。

彼女が書いてきた志望校は、記憶が確かならばここからでは飛行機でもかかる距離にある大学だ。

今は立場のせいで気軽に会えない彼女が、距離のせいで気軽に会えなくなってしまう。

「どうして？」

あのレベルの学校ならば、正直ここらあたりにもある。特殊な学科を希望しているわけでもない彼女が、わざわざそこを志望する理由がわからない。

理由があるとすればいいのも同然の家族のことであり、正直自分がそれを超える存在になっていくだなんて思い上がってはいない。

「家にいたくないからか？」

「あの家、売っちゃうって」

まるで人気のない彼女の家は、昔はそこそこ洒落た家だったのだろう。最低限以上の手を入れるものがいなくなった家は寂れ、落ち着いた住宅街で逆の異彩を放っていた。

そして、取り残された象徴のような家に関して、他人事のように呟く彼女の心は、そうしなければ耐えられなかった彼女の置かれた状況を強調させる。

あんな家でも、彼女にとっては家族と繋ぐ最後の砦のようなものだったのかもしれない。

それすらなくなって、彼女はどこか糸の切れた凧のようだ。

「だったらなおのこと、そんなに遠いところを選ばなくても」

代わりにはなくなるとも、別の何かにはなれていると思っていた。表面だけをさらりとなでるような付き合いしかない鈴木が、自分には一部を預けてくれていたのだと。

無理やり振り払われようとしたその手に、教師という職業を理由にしてどっつかずの立場に立ったままだった自分に気がつかされるだけど、全部わかった上で、それでも彼女を手放せない、手放したくない。ただそう思う僕はわがままな子供のようだ。

それでも、僕はその手を離すつもりはない。

「どうしてもやりたいことがあるのか？」

そこにしかない学科、というのもあるにはある。それを学びたい
めだったのなら、無理やりにも自分も納得はする。

受身で生きてきたとしか思えない彼女が、それだけやる気をだして
くれたということなのだから。

だけど、どう考えてもそうじゃない。

「逃げるのか？」

「そういう、わけでは」

追い込むようなまねをして、彼女は徐々に言葉数を少なくしていく。

「僕から逃げたいってこと？」

自信過剰な言葉を口にする。

「違う」

「じゃあ、高井君から？」

彼女が依存していた人間の名前ぐらいは知っている。その人の存在
が、彼女にとって救いになっていたことも知っている。それが依存
という歪な関係だと指摘する人もいるだろう。だが、確かに彼は彼
女を救っていた。

「そうじゃ、ない」

こんなやりとりなのに、はっきりとした否定の言葉に喜ぶ。

彼のことをもうそれほど意識していないということを知ることができて。

「だったらどうして？」

黙ったままの彼女に、その場にいるように言い聞かせて通話を終了させる。

おそらく一人きりで家にいるのだろう。

生活感のないあの家を思い浮かべ、そこに一人でいる彼女を想像する。

今までよりずっとそれが寂しくて、彼女の手をとって逃げ出したくなる。

だけど、それよりずっと伝えなくちゃならないことがある。

逃げ出していたのは自分だ。

立場だとか年齢差だとかを気にして、このままでいいと高をくくっていた。自分以外の周囲の人間には、彼女は見向きもしないと、そう思っていた。

携帯をポケットにねじ込んで、車のキーを手取る。

伝えたい、ことがある。

その気持ちだけで彼女の家へ車を飛ばした。

この日、ようやく言葉を伝えることが出来た僕は、将来彼女の隣に居る自分をようやく想像することができた。

もうすぐ、彼女と先生と生徒として過ごす、最後の一年が始まる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8163x/>

adagio

2011年11月19日04時13分発行